

神宮に祈られる大御心 ～伊勢神宮に関する御製を読む～

敬天塾 平井仁子

一、本年 宮中歌会始

御 製

天空にかがやく 明星眺めつ 新たなる年の平安祈る

召人 ピーター・J・マクミランさん

御 杣山明るむ 天に杣人の声ひびきたり「一本寝るぞ」

二、神宮と本居宣長

たなつもの百の木草も天照す日の大神の恵みえてこそ

訳：食べ物となるあらゆる木草も、天照大御神の恵みのおかげですよ。

朝宵に物くふじことに豊受の神の恵みを思へ世人の人

訳：朝も晩も、ご飯を食べる度に、豊受大神の恵に感謝しましょよ。みなさん。

三、鎌倉時代の御製

第八十二代 後鳥羽天皇 『歴代天皇の御製集』百四十四頁

神祇（建仁元年—一二〇一）

みもすそやたのみをかくる 神風の心にふかぬときのまざなき

（内宮御百首）

訳：五十鈴川よ。（私が）頼りにしている「＝拠り所にしている」神風が
心に吹かない時はありません。

ひさかたの空ゆくかぜに雲きこえてつきかげさむし宮河のあき

(外宮御百首)

訳：空を吹き渡る風によつて雲が消え、月の光が寒々しい。宮川の秋。

第九十代 龜山天皇 『歴代天皇の御製集』百六十四頁

雜（弘安元年—一二七八）

★世のために身をば惜しまぬ 心ともあらぶる神は照し見るらむ

（弘安御百首）

訳：私が世のためならばこの身を捨てても惜しいとは思わない決心であることを、この国の守護神である神々はきっと照らし見てくださるだろう。

訳うた：侵略を防ぐためなら惜しくない。その決心を神も見ている。

※以下、☆マークは『歴代天皇の御製集』にも掲載されている御製です。

第九十二代 伏見天皇 『歴代天皇の御製集』百六十八頁

河月といへるいふを

五十鈴川絶えぬ流れの底きよみ神代かはらず 澄める月かげ

（続千載和歌集）

訳：五十鈴川の絶えない流れは川底（までも）が清らかなので、

神代から変わらずに澄み渡る月光（が映つてゐる）。

第九十五代 花園天皇 『歴代天皇の御製集』百七十四頁

神祇を

神風にみだれしちりもをさまりぬ天照らす日のあきらけき世は

（風雅集）

訳：神風「=天の助け」によつて、世を乱していた騒乱（塵）も鎮まつた。

天照大御神が照らし出す日の光のように明るく清らかな世の中であることよ。

『誠太子書』

太子長 二 於宮人之手一、未レ知二 民之急一。

訳..皇太子は宮中の人たちの手によって（優しく育てられて）成長し（たので）、
いまだ民衆の（生活の）切実な苦しみをわかつていな。

常 衣二綺羅服飾一、無レ思二織紡之勞役一。

訳..常に綺麗な衣服を着ているけれども、

（それを作るための）糸を紡ぎ、布を織ることの苦労を思うこともない。

鎮 飽二稻梁之珍膳一、未レ辨二稼穡之艱難一。

訳..いつも贅沢な食事をお腹いっぱいに食しているけれども、

いまだ（それを作るための）種植えや刈り取りの苦労を理解してもいな。

於レ國曾無二尺寸之功一、於レ民豈有二毫釐之惠一乎。

訳..国に対しては、いまだに少しも功績が無く、

民に対しては、わずかな恩恵も与えられただろうか（いや、与えていない）。

只以レ謂二先皇之餘烈一、猥欲レ期二萬機之重任一。

訳..ただ先帝の残した威光というもののおかげで、

道理を曲げて天皇の重い地位に上ろうとしている。

無レ德而謬託二王侯之上一、

無レ功而苟莅二庶民之間一。

訳..徳もないのに、誤って、貴族達の上という（高い）地位に身を置き、
功績もないのに、分不相応にも、庶民の上に君臨している。

豈不二自慙一乎。（中略）

訳：自分で恥ずかしく思わないことがあろうか。

故思而學、々而思、

訳：よつて、（自ら）思索した上で学び、学んだ後にはまた深く思索し、

精通二經書一、

訳：聖賢の經典に精通して、

日省二吾躬一、

訳：毎日自分自身の振る舞いを省みるならば、

則有レ所レ似矣。

訳：（ようやく理想とする君主の姿に）近づくことがあるだろう。

四、室町時代（南北朝～応仁の乱）の御製

第百代 後小松天皇 『歴代天皇の御製集』百九十八頁

社頭祝言

☆日とてらし土とかためてこの國を内外の神のまもるひさしさ

うちと

（後小松院御百首）

訳：この日本は、伊勢神宮の天照大御神が日を照らし給い、豊受大神が五穀を始め

地上の暮らしを固め給い、いく久しくお守りになつてきた国であることよ。

訳うた：日を照らし 五穀実らせ この国を 神宮の神 久しく守る。

伊勢(享徳元年一一四五二)

さらに今つくる内外の宮ばしら すぐなる代々にたちや帰らむ

(後花園天皇御製和歌集)

訳：この度また(新たに)造営される内宮・外宮の宮柱よ。

(一)の宮柱のように(真っ直ぐで正しい時代に、(世の中は)立ち返ってくれるだろうか。

賜二足利義政 二

ざんみんあらそヒテ とルしゅやうノ び

殘民爭 採首陽薇

訳：生き残った民は、飢えを凌ぐためには首陽山で餓死した伯夷・叔齊のように、野草を争って採っている。

しょしょひらキテ ろヲ とぎス ちくひヲ
處處開 レ 爐 鎖 二竹扉 一

訳：(一方で將軍の館では)至る所で茶の湯の炉を開き、竹の門を閉ざして(世間を遮断し)優雅に過ごしている。

しきやう ぎんさんタリ はる に がつ
詩興 吟酸 春二月

訳：私の詩作の興も、この春二月の寒々しい景色の中で苦しく、酸い(つらい)ものとなる。

まんじやうノ こうりよく ためニカ たガコユル
滿城 紅綠 爲 レ 誰肥

訳：都中に咲き誇る花(紅)と生い茂る葉(緑)は、一体誰のためにこれほど美しく(肥えて)咲いているのか。(民が飢えているというのに、この贅沢な美しさは誰のためのものか。)

※二句目(處處)は別の解釈もあるようですが、

『明治文学全集』の解説を活かした解釈にしました。

伊勢(明応四年——四九五)

☆にごりゆく世を思ふにも五十鈴川すまばと神をなほたのむかな

（五十鈴川）

（御土御門院御集拾遺）

訳：濁つてゆく世の中を思うにつけても、五十鈴川の水のように、

濁りを取り払つて世を清めて戴ければと、なお一層伊勢の神に頼むことだ。

訳うた：世の濁り 清めてほしい 天照よ 五十鈴の川の ように明るく

祝（明応八年——四九九）

☆神代よりいまにたえせず伝へおく三種みくさのたからまもらざらめや

（御土御門院五十首和歌）

訳：神代から今の時代に絶えることなく代々受け継いでいる三種の神器を

守らないでいられようか。

訳うた：神代から 絶えず今へと 受け継いだ 三種の神器を 必ず守る

五、戦国時代の御製

第一百五代 後奈良天皇 『歴代天皇の御製集』二百十頁

神祇（大永元年一一五二一）

宮柱朽ちぬちかひをたておきて末の世までのあとをたれけむ

（後奈良院御製集）

訳：神宮の柱は朽ちさせない（で二十年）とに建て替える）という誓いを定め置いて、

未来の世代まで手本（となる制度を残したのは、どなたであつたのだろうか。

神祇（享禄三年一一五三〇）

☆いそのかみふるき茅萱ちがやの宮柱たてかふる世に逢はざらめやは

（後奈良院御製集）

訳：屋根も古くなつた神宮を式年遷宮できる時代が、来ないはずはない。

ことし イニえきシ ばんみん ク のぞム
今茲 天下大 疫 万民多 阻 二於死亡 一。

訳：今年、天下に疫病が大いに流行し、万民がたくさん、死に瀕している。

ちん たりテ たみノ ふ ぼ とく ず あたハ おおフコト はなはだ
朕為 二民父母一、德不レ能レ 覆 甚 自痛焉。

訳：私は民の父母として、徳を行き渡らせることが出来ず、たいへん心を痛めている。

ひそカニ うつス はんにやしんぎょういつかんヲ きんじニテ
窃 写 二般若心経一卷於金字一、（中略）

訳：密かに般若心経を金字で写した。（略）

こひねがハクハ たランコトヲ しつべいの みようやく
庶幾 虞 為 二疾病之妙藥 一。

訳：どうか、これが疫病の妙薬となることを願う。

(参考)『後奈良院御撰何會』

ぎよせん な ゾ

①上は上にあり下は下にあり 答え：ト（うらない）

②上をみれば下にあり下をみれば上にあり、母の腹を通りて子のかたにあり

答え：一（いち）